

保育の体験と思索

―子どもの世界の探究―(十五)

津 守 真

精神の原型を生きる遊び

子どもが自分自身となって遊ぶことができるころには、人間の精神の原型があらわれる。すなわち、そこでは、子ども自身、自分のかかえている問題を解いていこうとし、また、自分なりに世界を探究しようとしている。そのことは、すでに、いくつもの遊びの例に見てきたことであり、いたるところに見られることであるが、ここで重ねて、同じ遊びの中で、ほとんど同じような活動をしているながら、三人の子どもがそれぞれのやり方で、違った遊びをしている例をあげる。

十月八日

A (五歳) P (四歳) Q (三歳) Y (二歳) の四人が、最初のうち物のとり合いをしながら遊んでいたが、そのうち落ち着いて遊びはじめる。

Yは、長いつみきを布の上に並べ、「どうもろこし、こーやってどうもろこし」とひとりごとを言いながら布に包む。「こーやって、こーやってしばって、おべんどうみてー」とくるくるまわって、だれかにみてもらおうと思つてさがす。私が「いいの

ができたねー」というと、それを持って歩きまわる。

それぞれそがしくひとりずつ活動している。Yは包むこと、

Qは容器につきみをいれること、Pはいろいろな物をごたごたと箱につめ、ひとつずつとり出して手でいじり、それから、箱を押して歩く。Aは、箱の中に色つき、模様のついた布などをきれいに並べ、気に入るまで並べ直す。それから、布をルーペで見ると、「きれい」と言ってみせにくる。そして、フィッシャーの「たんじょうび」の絵本を開いて見ている。……

この遊びはまだ続くが、ここに掲げた、つみきを並べて遊ぶ活動だけを見ても、四人の子どもの個性があらわれているのを見ることができよう。Yはつみきを布に包んで見えない内部にいれる、それを出してまた包むなど、内部にいれたり、外に出したりすることをくり返す。Pは、つみきと一緒に、いろいろの種類のブロック、プラスチックの人形、頭や手のとれた動物、ままごとの皿や鍋など、さまざまなものをひとつの箱にいれ、それを取り出して調べる。異質な物を並べて遊ぶというのはこの子どもの遊びの特色である。Aは、箱の中を美しくする。美しく華麗なものを作り出すと努力が見られる。フィッシャーの『たんじょう

うび』も誕生祝の華麗なケーキの絵のついた本である。同じ場所で、同じような物で遊んでも、異なったことを追求しているのが見られて面白い。

いずれも、それぞれの子どもの個性でもあるし、また、だれの心にも共通にあることである。物を包んで見えなくしたり、また見えるところに出したり、外からは見えなくても、内部に何かが入っていること、内部には更にまた内部があること、それを外にとり出す時もあること。互いに異質な物が集まって一つの空間を形成することを認識し、試み、そこに動きを作ること。自分の心に憧れをもって思い描く美しさを目に見える形で作り出すこと。ということ、等々。遊びの中で、子どもたちは、くり返し、こうしたことを試み、探索し、そのことに身を没して時を過している。そして、時々、一緒にになり、互いに感心したり、ぶつかりあったり、力づけられたりして、遊びはつづいてゆく。

四歳の秋は、幼稚園でも、子どもたちは充実して遊べる時である。おとなが一緒に入って、それなりに面白く遊べるし、また、子ども同士だけで遊ぶことで、もっと落ち着いて、ゆっくりと遊べる時がたくさんある。幼稚園では、子どもは、自分を幼稚園生

活に適應させることもできるようになるので、おとなを困らせることも少なくなるのであるが、家庭では、自分のいろいろの側面が出るので、おとなを困らせる場面もたくさんある。次に丁度このころにあらわれた家庭の生活場面の事例をあげる。

夜、床にはいってから何度も起きてくること

十一月八日

Pは、夜、ねにいつてから何度も起きてくる。その度に、ついでいき、ねかしにいつても、また起きてくる。ふとんの上で起き上がったたり、上下さかさまにねたり、わるさをきわめる。もしもこの日の、ひるまのできごとを知らなかったら、おとなも癩癩を起しただろう。

この日は幼稚園の参観日だった。Pは、そのときおもしろをして、そのあと母親にくっついたきりだった。先生はいそいで別の部屋につれていって、他の子どもには分らなかったけれども、き

つといろいろ、心にわだかまりがあっただろう。夜ねてからは、ひるまの当惑が意識の表面近く浮かび上がってくる。ねにいつてから何度も起きてくるのは、こうしたひるまのできごとと当惑と関係があるだろう。

この日は、ひるまのことをおとなは知っていたから、何度でも起きてくることをおとなは理解をもって見ることができた。しかし、もしも、ひるまのことを知らなかったら、叱ったり、どなりたりしただろう。そうしたとき、子どもは決して弁解もしないで、にやにやしたり、わめいたりするだけであろう。こう考えると、おとなが怒りたくなるような行動は、何か、おとなが知らないところできったことと関係があるに違いない。おとなにとって、がまんがならないような行動ほど、その裏には、子どもにとってどうしようもない感情があるのではないだろうか。

普通は、ひるまの子どもの生活の中のできごととおとなに分らず、子ども自身の当惑の結果起きる行動だけがおとなの目に見える。その受けとめ方によっては、子どもにかわいそうなことをしてしまうことになる。

洋服を着がえようとしなさい

十一月二十六日

Pは夜ねる前に、洋服をなかなか着かえない。上衣を一枚ぬくと、落ちていたはさみで切り抜きをはじめる。「早くしなさい」と言われても、「もうひとつあるんだ」と言って紙を切り抜く。

「洋服をきかえてねにいこう」と言っても洋服の釦を外したまま、途中で椅子をおり、落ちていた箱をいじる。いじりながら「はるこせんせい　ものおきに入つてよく考えてらっしゃい」と言つて洋服をぬぐ。母親が「それぬいで」とブラウスをぬぐのを手伝うが、ブラウスをぬいでぐにやぐにやする。母親がシャツをぬがせるが、いすよりかかつて、ぐにやぐにやして、注射をしたところが痛いと言つて文句をいう。

母親が気をかえて、「Pちゃん　きつとねまきをきられないんだわ」と言つて目をつぶると、Pは急いで着はじめた。母親が「もうどうせだめだ」と言つと、Pは歌を口ずさみながら、どんとん着はじめ、私のところに来て「ねー、早くきかえちゃおうね」

と言う。母親は目をつぶっている。釦をかけながら、わざと、「あー、まんがおもしろいなー」と言う。母親が「まだまんがよんでるらしいぞ」というと、P「はい　もうおわり。できた」という。母親「なにができたんだ」と言つて目を開いて、一緒に笑う。

目を閉じること——意志を停止させること

このころ、Pは、この例のように、自分でできるのにやらないということが多い。そのことは、しばしば見られることであるし、何も問題としてとり上げるべきことでもない。身辺自立のこととは、一度できるようにすれば、それからあとは常にできて向上しつづけるというような直線的進歩をつづけるものではない。それは現象としては、できるようになる時期やできなくなる時期を交替反復しながら、全体としては上昇方向に進む。ここで私がとり上げたのは、着がえるのがいやだと言つていた子どもが、おとなが目をつぶっていると、どうしてやる気になるのかという点である。

この子どもは、夜になつても、まだ寝にいきたくないのだから、ねにいくように言われても、何とかして起きていようとす

る。おとなは、何とかして定時にねかせようとし、その準備をはじめ、起きていようとする子どもの気持の方向とは逆の方向におとなの言動が向かっていることは、この記録から明らかである。

目を閉じるということは、おとなが子どもに対して向ける、方向をもった意志を停止させることである。「早くしなさい」「やりなさい」「ぬぎなさい」という時のおとなの目は、子どもを射るように見つめている。むかし、ギリシヤの哲学者エンペドクレスは、目から光が発射していて、それによって物を見ることができると考えたという。物理的には、目から光を放射していないかもしれないけれども、こういう時の子どもは、おとなの目から強力なパワーが発射されていると感ずるのであろう。視線という語があるように、われわれも、他人の視線に圧せられる力を感ずることがある。蛇のように曲折した視線に出会って、たじろがされることもある。そのおとなが目を閉じたときには、その視線は方向を消し、力を失う。

ある方向をもった力は、それに反撥する力を呼び起こす。一方的に力を加えた場合には、相手が従順に従っているように見えても、その背後には反撥する力を強めていることは、たいがいの場合に認められる。早く着かえさせようという意志を強めれば、着か

えまいとする力はそれだけ強くなる。もっと強く言えば、子どもはそれに従うだろう。けれども、そのことが、子どもに別の反応をひき起こしてゆくだろう。

眼を閉じて相手に加える力が消えると、子どもの側の反撥力も消えて、それまで反撥力の下にかくれていたその逆の力がはたらかきはじめる。そして、子どもは自分で選択して、自分で行動をきめるであろう。自分から行動しているところには遊びの例で分るように、子ども自身の姿があらわれるから、おとなも、その位相で、子どものテンポで一緒に進むことができる。

目を閉じるということが、相手に向ける力をなくすることであるなら、目を開いているということは、どういうことになるだろうか。目を閉じることの作用から推論するならば、目を開いているときにはそれだけで、相手に力を加えていることになる。「見る」という精神作業においては、「見る」はたらくき自体は意識されないで、見る内容だけが詳細に意識される。見るはたらくきにもいろいろある。「見張っている」とときには、視野をできるだけ大きく一ぱいに開いて、見ているすべてのものを、己れの目の中に食いつくすかのようなものである。見るものを、自分流儀にあてはめて、自分の思うようにしようとするときには、見るものすべて食べて、嚙んで消化してしまうかのようなのである。「見守る」ときに

は、相手に向かう力は緩和されるが、一定の範囲から外に出ないように、外部から侵入するものがないように、その状態が保たれるように、たえざる緊張がある。見るはたらしきには、そのほかいろいろの精神作業が伴うが、ここではこれで止める。

目を閉じる時には、こうした精神作業が停止する。子どもの側からいうならば、おとなの意志が停止したときに、子どもの自発的意志がはたらしきはじめ、おとなの意志とも対等に、自発的応待をすることができるようになる。それは、おとなが見張る目をもっている間は不可能なことなのである。

保育や教育は、子どもに、ある特定のパターンを身につけさせればよいものではなくて、子どもが自分らしく、自分の課題を追求しつつ生きることがを根本前提とするものであると思う。そのとき、しばしば、おとなは「見張る」おとなであることをやめて、目を閉じることを必要とするのではないだろうか。

現実と遊び

ここに掲げた場面でもう一つ注目する点がある。それは、ここで、おとなが本当に目を閉じて眠ったりしたのではなく、仮に、一時、目を閉じているのであって、全体が遊びとして行なわれて

いる点である。子どもも、おとなが目を開いているのはわざとであることを承知しており、目を開いたときにおとなを驚ろかそうというように、子どもの側の意志もはたらい、おとなのやりとりを楽しんでいる。衣服の着脱というのは、場合によっては、現実だけで終始する可能性の大きい場面である。それがおとなが目を閉じて、子どもに向かう意志をやわらげたときに、おとなのやりとりを楽しむ遊びに転換された。おとなの側から言えば、目標に直線的に向かう意志から、瞬間を共に味わい楽しむ過程への転換である。

このように、同じことをしていても、そのことを楽しめるようになったときに遊びとなる。ここでは、子どもとおとなと、互いにやりとりを楽しめるようになったときに、互いに分りあえるものを見出したといえるだろう。現実が遊びとなったときに、人間相互の間の根底にあるものにふれることができたのであると思



う。